

Object Shift

小 林 敏 彦

1. Holmberg's (1986) generalization

Bobaljik (1995) は、次に示す Holmberg's (1986) generalization は Germanic language の INFL は affixal であり、したがって、PF merger の適用を受けることが要求されるとする。

(1) Holmberg's (1986) generalization:

Object shift (OS) is possible only if the (main) verb raises out of the VP.

(Holmberg 1986)

以下に示すデータは (1) の効果を示す。(2) に示されるように、主動詞 V が VP の外に繰り上げられた場合、目的語 NP は VP の外に移動することが許される。それに対して、主動詞 V が VP の外に繰り上げられない場合は、(3) の埋め込み文のように、目的語は移動できない。

(2) Ábarnum drakk stúdentinn bjórinn stundum t_j. (Icelandic)

In bar.the drank student.the beer.the sometimes

'In the bar, the student sometimes drank all the beer.'

- (3) a. Det var godt at Peter ikke købte den. (Danish)
 it was good that Peter not bought it
 'It was good that Peter didn't buy it.'
- b. *Det var godt at Peter den ikke købte tj.
 it was good that Peter it not bought

しかしながら、多くの研究者 (Vikner1991, Koopman1995等) によって Holmberg's generalization は SVO 型の Germanic language には当てはまるが、SOV 型の Germanic language にはシステマティックには適用できないということが示されている。例えば、次の Dutch の例は、この言語では、Object Shift は主動詞 V が VP の外に繰り上げられないコンテキストに於いて可能であるということを示している (cf. Koopman 1995).

- (4) ... omdat deze uitgeverij zulke boeken vandaag de dag niet
 because this editor such books today not
 heruitgeeft
 republishes
 'because this company does not presently republish such books'
 (Koopman 1995: 140)

このような「例外」は Holmberg's generalization の効果を引き出す純粋に統語的なアプローチに疑問を投げかけることになる (cf. Bobaljik and Jonas 1996)。つまり、純粋に統語的なアプローチでは、(2)–(4)に見られるような言語間の違いがどのように導かれるのかが明確ではないのである。

2. Bobaljik (1995)

Bobaljik (1995) は Holmberg's generalization について興味深い説明を提出し、特に、なぜ SVO 型の Germanic language は Holmberg's generalization の特性を示すのに、SOV 型の Germanic language はそのような特性を示さないのかを説明する。彼は、このような違いは、PF merger の adjacency requirement から引き出すことができるとする。

(5) The Adjacency Condition on PF merger:

In order for an affix and a stem to be combined, they must be adjacent.

(Bobaljik 1995: 57)

ここで、彼の分析を見てみよう。まずはじめに、SVO 型言語である Icelandic の(2)の例((6)として再掲)を考えてみよう。(6)では、既を示したように、主動詞と目的語がともに VP の外へ繰り上げられている。

(6) Á barnum drakk stúdentinn bjórinn stundum (bjórinn).

In bar.the drank student.the beer.the sometimes

'In the bar, the student sometimes drank all the beer.'

(Icelandic)

ここで、動詞 *drakk* 'drank' は、主語 NP *stúdentinn* 'the student' に先行する上位の位置にある。Bobaljik (1995) は INFL は affixal な特性を持つと仮定し、この場合、V が INFL に繰り上がっており、したがって、INFL と主動詞 V との間の PF merger に対する (5) の adjacency は満たされており、OS が許容されれるとする。

[illegible]

次に、(3)((8)として再掲)を見てみよう。ここでは、主動詞VはVPの外に繰り上げられておらず、したがって、OSは許されない。

- (8) a. Det var godt at Peter ikke købte den. (Danish)
 it was good that Peter not bought it
 'It was good that Peter didn't buy it.'
- b. *Det var godt at Peter den ikke købte (den).
 it was good that Peter it not bought

Bobaljik は、(8)で OS が許容されないのは、目的語が、もし INFL と V の間の VP 外の位置に移動すれば、PF merger の adjacency condition に違反するためであると主張する。

- (9) a. ... [at Peter INFL [(ikke) (Peter) kØbte den]]
 |_____|| PF merger
- b. *... [at Peter INFL den [(ikke) (Peter) kØbte to]]
 |_____*_____||
PF merger blocked

このような説明が正しいとすれば、Bobaljik (1995) は正しく Holmberg's generalization が SOV (或いは head-final) 型の Germanic

language には適用されないということを説明する。つまり、たとえ、V が繰り上がっていなくても、これらの言語では、(11) に示すように、INFL と主動詞 V との間の adjacency condition に抵触しないからである。

- (10) ... omdat deze uitgeverij zulke boeken vandaag de dag niet
 ... because this editor such books today not
 heruitgeeft (= 4)
 republishes
 'because this company does not presently republish such books'

- (11) ... [IP deze uitgeverij zulke boeken [VP vandaag de dag niet
 (zulke boeken) heruitgeeft] INFL]

3. Problems with Bobaljik (1995)

まず、(7)と(9 b)の違いについて、考えてみよう。

- (7) [Á barnum V-INFL [stúdentinn (V-INFL) bjórinna [VP stundum

↑ _____ ↑ _____

(V) (bjórinna)]]]

- (9b) *... [at Peter INFL den [(ikke) (Peter) købte (den)]]

_____ * _____ PF merger blocked

(9b)で、目的語 NP *den* 'it' が INFL と主動詞 V *købte* の PF merger を block するといふのであれば、(7)においても、INFL と主動詞 V との

PF merger は、block されるというべきであろう。そこで、(7) では、V が INFL へ移動し、INFL-V の merger が成立して、適格となる。

しかしながら、Holmberg (1999) は、Bobaljik の説明は、(12) のような場合については成立しないとする。

(12) a. *Jag talade henne inte med to.

I spoke her not with

a'. Jag talade inte med henne.

I talked not with her

b. *Jag gav den inte Elsa to.

I gave it not Elsa

b'. Jag gav inte Elsa den

I gave not Elsa it

c. *Dom kastade mej inte ut to.

they threw me not out

c'. Dom kastade inte ut mej.

they threw not out me

(12a), (12b), (12c)のいずれにおいても、INFL への V 移動により、V と INFL は adjacent である。しかしながら、Object Shift は許されない。(12a)では、目的語 NP は前置詞を越えて移動しており、(12b)では、間接目的語を、そして、(12c)では、verb particle を越えて移動している。そこで、Holmberg(1999)は、Object Shift の特徴の一つとして、次のように述べる。

(13) Object Shift does not cross an overt c-commanding head.

Holmberg (1999) はスカンジナビア語の OS に見られる(13) の特性に

ついて non-focused DP は $-Focus$ を持っており、この素性は $+Focus$ を持つ要素によって統率されなければならないとする。 $-Focus$ の目的語は、 $+Focus$ である動詞に近い位置に移動する。例えば、それ以外の、P などの OS を block する c-command する主要部も $+Focus$ を持っているが、OS を block しない副詞や否定辞などは $+Focus$ をもたないとする。つまり V 移動に依存する OS は動詞が $+Focus$ であるという仮定に基づくのである。

4. Chomsky (2000, 2001a)

Chomsky (2001a) は OS の特性について、特別な解釈 (INT') を vP の left edge にある要素に付与する language-specific な規則があるとする。V が vP から移動する場合、目的語 DP はその位置に留まる。もし目的語 DP が解釈 INT' と適合しなければ、強素性が v に与えられて目的語を左方に引き上げる。ここで、別の language-specific な操作 (DISL(ocation)) がそれを vP の left edge から移動させる。

このような素性付与は phase に基づく考え方によってなされる。基本的な考え方は、strong phase が形成されたら、その前の phase は Spell-Out されて、その補部が取り出しに対して opaque になるというものである。これは次の Phase Impenetrability Condition (PIC; cf. Chomsky 2000, 2001a) に示される。

(14) Phase Impenetrability Condition:

In a strong phase HP, in the configuration [ZP Z ... [HP α [H YP]]], ZP the next strong phase:

- a. The domain of H (here, YP) is not accessible to operations at ZP, but only H and its edge
- b. Interpretation/evaluation for PH1 (HP, here) is at PH2 (ZP)

Phase は vP または CP であると規定され、(14a) の edge は HP の specifier とされている。(14a) から、YP は Z あるいはそれより上位の要素の素性に対して opaque であるということになる。YP の要素を ZP の照合領域あるいはそのさらに上位に取り出すただ一つの方法は、それがまずはじめに Z と H の間に移動することである。(14a) は、もし、HP が Spell-Out の時点で解釈・評価されるとすれば、そして、HP の spec と head がなおも派生に利用できるとすれば、(14b) から得られる帰結となる。

このような考え方によると、移動は、下位の strong phase から次の上位の strong phase の間でのみ生じることになる。例えば、VP 内に wh 句がある場合、その wh 句は vP が Spell-Out された後では、VP から移動できないということになる。逆に言うと、wh 句が移動するためには、まずはじめに vP が Spell-Out される前に、上位 phase である CP と V との間に移動しておかなければならないということになる。

Chomsky の説明は、VP 内の leftmost な音韻論的に overt な要素であるものが OS の適用を受けるという事実を捉えることはできるが、しかしながら、Holmberg の説明と同様に、DP のみが OS の適用を受けるという事実は捉えられていない。つまり、なぜ、PP や predicate には INT' が付与されないのかが不明である。また、この説明は、OS は動詞の移動に依存しているという事実を捉え、Holmberg (1999) が、(15) のような例を基に議論しているように、その V 移動は head-movement である必要はないということを許す。

- (15) [CP Kysst [C' har [TP jag *tr* henne [XP inte [AuxP *t*_{Aux} [vP *to ts tv* [VP *tv*
 kissed have I her not
 to]]]]] (Swedish)
 'I haven't kissed her'

Holmberg は participle の C への長距離の主要部移動を (15) において仮定している。なお, *v* に強素性 (EPP) が付与されて, 目的語が string-vacuously に移動し, DISL によって, 目的語が XP の left edge, つまり, 副詞の左側に移動している。

5. Object Shift

ここで, 英語の (16) の文の派生を見てみよう。

(16) I never kissed her.

(16) は, まず, V *kissed* と DP *her* とが Merge して (17) の VP が構成される。

(17) [_{VP} kissed her]

(17) に *v* が Merge して, V *kissed* が *v* に移動し, さらに主語名詞句 *I* が Merge して, (18) に至る。

(18) [_{vP} I kissed-*v* [_{VP} *t*_V her]]

この段階で, VP は Spell-Out されて, 目的語 *her* は移動することができない。つまり, Object Shift が生じない。(18) の構造に *never* が Merge し, XP が形成され, そこに T がさらに Merge して, T の強素性 (EPP) によって, *vP* 内主語 *I* がそこに移動し, (19) が形成されて, (19) 全体が Spell-Out され派生が収束する。

(19) [_{TP} I-T [_{XP} never [_{vP} *t*_S kissed [_{VP} *t*_V her]]]]

次に、Norwegian の派生を (20) の文について見てみよう。

(20) Jeg kysste henne aldri.

I kissed her never

'I never kissed her.'

まず、(17) の場合と同様に、V *kysste* 'kissed' と DP *henne* 'her' とが Merge して (21) が形成される。

(21) [_{VP} kysste henne]

次に、英語の (18) の場合と同様に、v が VP に Merge して、その v に V *kysste* 'kissed' が移動し、主語名詞句 *jeg* 'I' が vP に Merge し、(22) に至る。

(22) [_{vP} jeg kysste-v [_{VP} tv henne]]

この段階で、Norwegian では、英語と異なって、vP 補部である VP が Spell-Out されないと考えられる。つまり、動詞 *kysste* が英語の場合と異なって解釈不可能素性を持ち、(22) の位置ではまだその最終的な着地点 C に到達していないからであると考えられる。(22) からは、vP に *aldri* 'never' が Merge して XP が形成され (23) の段階に至るとする。

(23) [_{XP} aldri [_{vP} jeg kysste-v [_{VP} tv henne]]]

この段階で、XP 主要部に強素性が付与され则认为てみよう。そうすると、DP *henne* 'her' はその強素性に牽引されて、厳密循環的に [Spec, XP] に移動する（ここで、*jeg* が移動しないのは素性の不一致によるものと考えられる）。

(24) [XP henne [XP aldri [vP jeg kysste-v [VP tv to]]]

さらに T が XP に Merge して TP に至り、主語名詞句 *jeg* 'I' が T の強素性 (EPP) によって [Spec, TP] に移動する。

(25) [TP jeg T [XP henne [XP aldri [vP ts kysste-v [VP tv to]]]

(25) の構造に C が Merge し、C の強素性によって動詞 *kysste* 'kissed' がそこに移動し、C の別の強素性 (EPP) が主語名詞句 *jeg* を [Spec, CP] に牽引する。

(26) [CP jeg kysste [TP ts t_T [XP henne [XP aldri [vP ts tv-v [VP tv to]]]
I kissed her never

この段階に至って、全ての素性の照合と値付与が完了し、CP 全体が Spell-Out されて派生が収束する。

Norwegian では、(20) の文の派生が、(21) – (26) に示したように implement されるとすると、(24) の段階で Object は Shift されており、V 移動と Object Shift は独立したメカニズムによるものであるということになり、Holmberg's generalization は Object Shift を捉える一般原理ではないということになる。

6. 結び

本稿では、第 5 節に示したように、Object Shift の現象は、V 移動との関連で捉えられるものではなく、副詞あるいは否定辞を含む XP 主要部に (随意的に) 付与される強素性によって生じる現象であり、V 移動はそれとは独立の C の強素性によって implement されるものであり、これらの

ことは、Holmberg's generalization に対する反論となるものであり、Chomsky (2000, 2001a, 2001b) の PIC に基づく派生によって説明できる現象であるということを示した。

参考文献

- Bobaljik, Jonathan David (1995) *Morphosyntax: The syntax of verbal inflection*. Unpublished Ph.D. dissertation, MIT.
- Bobaljik, Jonathan David and Dianne Jonas (1996) "Subject positions and the role of TP," *Linguistic Inquiry* 27(2), 295-236.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist inquiries: the framework," in R. Martin, D. Michaels and J. Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, Cambridge, MA: MIT Press, 89-155.
- Chomsky, Noam (2001a) "Derivation by Phase," in Michael Kentowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, Cambridge, MA: MIT Press, 1-52.
- Chomsky, Noam (2001b) "Beyond Explanatory Adequacy," *MIT Occasional Papers in Linguistics* 20, 1-28.
- Holmberg, Anders (1986) *Word order and syntactic features in the Scandinavian languages and English*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Stockholm.
- Holmberg, Anders (1999) "Remarks on Holmberg's Generalization," *Studia Linguistica* 53 (1), 1-39.
- Koopman, Hilda (1995) "On verbs that fail to undergo V-second," *Linguistic Inquiry* 26 (1), 137-163.
- Ochi, Masao (2000) "Multiple Spell-Out, PF merger, and Adjunction," in Michele Feist, Steve Fix, Jennifer Hay and Julia Moore (eds.) *MIT Working Papers in Linguistics* 37, 211-226.
- Svenonius, Peter (1999) "On Object Shift, Scrambling, and the PIC," *A Few from Building E39: Papers in Syntax, Semantics and their Interface, MIT Working Papers in Linguistics* 39, 267-289.
- Vikner, Sten (1991) *Verb movement and the licensing of NP positions in the Germanic languages*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Geneva.